戰爭と文學[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

人間が欲するとせざるとに拘はらず、これに向つて突進まねばならぬものが二つあります。それは個人的には死であり、民族的には戰爭であります。人間は――他の生物、即ち有情物も同様であるが――誰しも死を嫌ひ、これを怖がります。それでも死は免れられるものではありません。しかし、人間が死を怖がるのは實は迷ひであつて、死とは着物の着換に過ぎないのです。着物の着換といふよりも、軍人や官吏の制服の着換といふのが適切であらう。階級があがるに從つて軍人も官吏も、違つた肩章や襟章の服に着換へなければなりません。是即ち昇級である。この身體は私の現在の階級を見はした服であつて、この制服の續くかぎり、わがつとめを果した暁に、階級の上つた新制服に着換へるのが、死であり生であります。これが、死生の正しき見方であり、その正體であります。もつとも服務の成績が惡ければ、左遷といふこともあり、懲罰といふこともあるから、着換物が必ずしも上の階級のものとは限らない。それがみすぼらしい囚人服であることもあらう。

かく觀じて來るといふと、死必ずしも懼るべきでなく、生必ずしも喜ぶべきでもありません。正しき生こそ喜ぶべき生であり、惡しき死こそ恐るべき死であります。惡しき生は嫌はるべき、呪はるべきであり、正しき死は望ましく祝はるべきであります。吾人は幾多の醜き生や美しき死を見て居ます。道に叶つた死を得ることこそ人生の究極の目標なのだから。

　戰爭にしても同様だ。人生あれば戰爭あるのであつて、戰爭は民族的生命を或は更新し或は衰頽せしめるものであります。民族が戰爭によらずして亡びた例はあるが、戰爭によらずして興つた例はないのです。歴史あつて約三千五百年以來人類世界には大小八千餘の戰爭が記録されてゐるさうであります。歴史こそは隨一[の]戰爭文學であり、戰爭の叙事詩であります。すべての戰爭は平和を目標としたものであるが、平和は戰爭を準備する合間の、即ち幕合の出物のやうな感をさヘ與へる、その位戰爭[が]多かつたのであります。

書經は更に支那最古の歴史文學であるばかりでなく、その高級性に於いて世界最古の歴史であり、文學であるのであるが、堯典舜典を始めとして、湯誓、武成などいづれも戰爭記録の文學ならざるはないのです。中にも湯が桀を討ち。武王が紂を討つたその理念は、義をもつて不義を討つたといふ點で、そのまゝ今日の大東亞戰爭の理念になるものであります。

　易經が世界最古の經典たることはいふまでもないが、六十四卦の中の第七卦が師で、戰爭の道を説いた卦であります。しかもその前の五四卦は天地定まり、萬物生れ人間生まれてやうやく國を立てることが説かれ、第六卦が個人の爭の訟のことで、その次が民族の爭の師、即ち戰爭のことになつてゐるのであります。即ち易の作者は、民あれば國あり、國あれば内には人民同士の爭あり、外には外國との戰爭ありと觀たのであります。

　さて易の作者たる文王は戰爭のことをどう觀てゐるか。師の卦辭を見よう。

「師**貞丈人吉**无咎」

といつてゐる。これを孔子はかう解釋して居られるのです。

　「彖曰師衆也貞正也能以衆正可以王矣剛中而應行險而順以此毒天下而民從之吉又何咎矣 」

とあります。戰爭は正しくなくてはならぬ。正しい戰爭なら民衆がよく應じて、どんな苦しいことでも辛抱するから**吉**无咎、即ち目的を達成するといふのであつて、正しき戰爭は必ず勝つといふことであります。これが文王や孔子の戰爭觀であるのですが、釋迦世尊は戰爭をどう觀られたでせう。

法華經安樂行品に、

　「譬如強力轉輪聖王欲以威勢降伏諸國、而諸小王不順其命時轉輪王起種種兵而往討伐……如來亦復如是於三界中為大法王以法教化一切衆生見賢聖諸軍與五陰魔煩惱魔死魔共戰有大功勳滅三毒出三界破魔網爾時如來亦大歡喜……久護明珠今乃與之」

　これは直接戰爭を意味するものでは母論ありません。如來が賢聖諸將と共に人間界の惡を破摧することを轉輪聖王の征戰に譬へたのであるが、しかし、轉輪聖王が現實の惡を破摧せむために戰爭の欠くべからざるを肯定されたものであります。釋尊は、轉輪聖王がまつろはざる諸小王を征服するのと同様に、

　「如來亦復如是、以禪定智慧力得法國土、王於三界、而諸魔王、不肯順伏、如來賢聖諸將與之共戰」

といつて居られます。即ち如來は精神の戰爭即ち法國の戰爭と、現實界の戰爭即ち轉輪王の戰爭を二つながら欠くべからざるものとして肯定されたのであります。

これによつて見ると、戰爭は惡を破碎し善を擁護するのが、その本來の目的であります。わが日本歴史に於ける「ことむけ」と一致するのであります。「ことむけ」とは、おほみことに從はせることで、これにまつろはぬものは、武力によつて征服することであります。即ち轉輪聖王の戰爭であります。

しかるに戰爭の動機や目的を經濟力に求める思想があつた。これは最近まで、日本の學界の一部にもあつた思想であるが、これこそ米英思想の中心をなすものであります。物を獲得して動物的生存を維持し享樂することを人生の目標と心得る、米英人の動物主義です。個人の動物的生存はその道徳的即ち神格的任務を達成せんがためなのであります。この肉體は方便であり、制服であつて生命そのものではない。國家にしても同様で、國家は或道徳的目標を達成せんがためにあるのであつて、英米人が考へてゐるやうに、その中に包合された國民各個人の動物的生存を亨樂せしめんためではないのです。しかも個人はその國家を通してのみ、即ち國民の一人としてのみ、その神的責務が全うせられるのであります。端的にいへば國家の正當なる目標は全人類を神に引上げることである。皇道とはこれに他ならない。國民の個人個人は、その國家目的達成のために生まれて來てゐるのであつて、かるが故に國家のためには、喜んですべてを捧げるのであります。日本精神がこれであり、易の思想、孔子の思想、釋尊の思想の根本義がこれであります。即ち、東洋の思想であります。

もしも戰爭が單に物資獲得のためであるならばそんな馬鹿馬鹿しいことはない。身死して物何するものぞ。日本が自存自衛を主張するのは、決して動物的自存とか經濟的自存を意味するものではないのです。日本なくんば皇道がないから、日本の自存自衛を主張するのであります。かの米英人の福祉のために日本は勝たねばならない。日本勝たねば、米英人は動物の域から脱出して神の域、進むことが出來ないからであります。（拍手）これは逆説ではない、讀んで字のごとく然りである。佛教では、食事を取る時に、道の器を成さむために食物を取つて飢渇を醫すといつて居ます。これは佛教に限つたことではなく、全有情界を通じての正しい生活態度であつて、これに反したのは間違つた、人性を賊する生き方であります。

われわれは、天皇に仕へたてまつらんがために生れてゐると信じてゐます。その通りです。そして天業翼賛のために生き、働き、戰ひ、而して死ぬといひます。正にその通りであります。天皇は道にまします。天皇はもつとも正しき人類の指導者にましますからであります。天皇のなしたまはんとする業、即ち皇道または天業は、取りも直さず、わが生の目標であり、全人類の生の目標[で]あるからであり、こゝに君民一體の實があるのであります。

さて大東亞戰爭は如何なる戰爭であるか。歴史上八千數百の戰爭があつたさうであるが、この大東亞戰ほど、神性と動物性の對立の明瞭な戰爭はかつてなかつたのであります。この戰爭に米英が勝つたら、ニユーヨークやロンドンにはもつと大きな建物が立ち、もつともつと多くの酒場やダンス場が出來て、人類の獸化が急テンポに進むでせう。その反面にアジヤ十億は米英の植民地土人の運命の下に呻吟しなければならない。われら十億はますます祖先の文化も精神も失ひ、米英人の便所を掃除して、殘飯を貰はなくてはならない。死してはその髑髏は英米人の玩具の原料とならざるを得ません。しかして、それにも増して悲しむべきは、尊いアジヤの心が失はれてしまふのであります。アジヤの心とは佛の心であり、神の心であります。動物的體に居ながら神たらんとする憧憬と努力の心であります。（拍手）これをなくしてしまつたが最後、人類は禽獸へ顚落し、ついで亡びてしまふのです。

しかしこの戰爭に日本が勝つたらどうなる。そしたらアジヤ人は自由な民になります。アジヤの地で、アジヤ人が作るもつともおいしい食料や、もつとも香ばしい香料を、思ふ[存]分アジヤ人が享樂出來ます。その精神力も體力も、奴隷的に強ひらるゝことなく、祖先よりの尊い理想の實現のために、喜びと誇の中に使用することが出來ます。そしてアジヤをその本然の尊さに引戻し、アジヤに地上最高の文化を造り出して、極樂を現前せしめることも出來るのであります。

さて最後に文學と戰爭のことであるが、その前にこの文學のことについて一言斷らなくてはならないことがあります。それは文學に對する東西の觀念の差のことであります。

東洋の文學は飽くまで、その道義的人生觀に基づいて、道義的なものであつたのです。即ち文學は、人間性の獸的方面をでなく、その神的方面を對象としたのである。即ち善惡正邪の明らかな判斷と信念を有する大人格の聲であつて始めて文學であつたのです。孔子が「詩三百一言以蔽之曰思無邪」といはれて居ますが、これが東洋的な文學觀であります。だから東洋では、文學者といへば聖賢君子と同義語であつたのであります。世界最古の文學たる支那文學も印度文學も、いづれも「經典」と呼ばれるものである。道義を基調としない文學は媱談として蔑まれてゐました。今日西洋文學の大部分は、東洋的標準からいへば、媱談に屬するものであります。殊に文藝復興期以後、いはゆる人性解放の美名に隱れた文學に於いて然りであります。人性解放とは人間の動物本能の解放を意味するのであるが、人間よ動物へ歸れ、といふことであります。そこで人間の動物生活方面が盛に描寫され讃美されてたとへば戀愛などは文學の好題目であるばかりでなく、主題目たる觀を呈したのであります。自然主義、耽美主義、官能主義などといふことばで呼ばれて來た文學がそれであつたのです。何んのことはない、春畵を繪畵の本道といふのと變はないのです。實際春畵的名作といふのが全藝術界を風靡したものであります。日本の明治大正時代の文學もこの類に屬するものが多いことは諸君も直ぐ氣がつくことゝ思ひます。

ピユーリタン時代の英米人はそれほどでもなかつたらうが、七つの海を領有してからの英米人は完全に神を離脱して、動物に戻つた。いな或は彼等はわれわれが神の子孫であるのとは違つて猿の子孫であるのかも知れません。ダーウヰンは彼らの家圖を書いたのかも知れません。彼らの文化なるものを見るがよい。建物といひ、生活振りといひ、すべてが動物的本能の滿足を中心としてゐるではありませんか。彼等は物を獲得して肉的享樂を得ることが目的であります。これに反して、東洋人は、「子孫のために美田を買はず」で、肉體の安逸享樂を單に目的としなかつたばかりでなく、これを罪惡視したのでありました。質素な住居に住んで、粗衣粗食に甘んじ、しかもその中に樂しみと美しさとを造り且つ感ずることが、東洋的な正しい人生觀であります。安貧樂道といふものであるが、これは、人間の動物性を抑へて、その神性を生長させることを目標とする人生觀の現はれであります。金持の道樂姿は詩にも繪にもならない。賤が我家に默々と勤勞する者こそ詩にも繪にもなるのであります。英米文化は獸慾文化であり、生殖器文化であるが、東洋の文明は祭祀文化であります。英米文化は貪欲文化であり、東洋のそれは敬虔な感謝奉仕の文化であります。英米人は權利を主張するが、東洋人にはたゞさゝげることあるのみで權利といふものがありません。英米人は、自分の性慾の滿足のために結婚します。東洋人は家と親のために結婚します。西洋人は親本能のため子を生む、東洋人は祖先と國のために子を生む。英語では好き家庭のことをSweet Homeといひます。甘い家庭といふ意味で、限りなき抱擁とキツスを想像させることばであるが、東洋の家庭は厳格たる秩序を基準とします。味覺に例へれば淡ゝたるべきであるが、むしろ若干の苦味や渋味を帶びるべきであります。（拍手）こんなに人生觀が相反するのであります。

英米人はたゞ物をしか見ない人種であるから物質文明が發達しました。東洋人が自然の意味を考へ、三界衆生のために極樂の設計をしてゐる間に彼等は、己の狀態を充たすために船を作り、大砲を造つてゐたのであります。（拍手）これ彼等が物質文明に進んだ原因で彼等は月や花の美しささへ分りません。忠や孝の壯嚴など猫に小判であります。彼等はたゞ黄金と生殖器に見惚れる民族であります。彼にはわれわれがもつてゐるやうな精神的の富はないのであります。

しかるに明治以来われわれも英米の文物と共にその人生觀や文學觀までも眞似しました。王者でありながら乞食に成り下らうとしたのであります。神でありながら獸に近づかうとしたのであります。物質文明に於いて彼等はわれわれより一日の長があつたのであります。しかし精神文化に於いてはわれわれは、彼等より百日の長があつたのであります。それを忘れて、永いこと迷つてゐたのであります。

大東亞戰爭は、東洋人が、この米英的まじなひから眼醒めるための警鐘でありました。この戰爭に於いて、彼等はその菩薩的假面をかなぐりすてゝ、夜叉の本性を遺憾なく暴露したのです。われらの祖先たちが、苦心惨憺として、惡魔の繪や像を造つたのであるが、いくら赤い角青い角を生やしたところで、そこには尚東洋的な愛嬌をどうすることも出來なかつたのです。根が善良なわれわれの祖先としては惡魔を描くのは至つて不得手であつたのです。われわれは幸にも惡魔の正體を眼のあたり見ることが出來たのであります。――それはルーズベルトとチヤーチルであります。

さて、文學は如何に行くべきか。文學者はまづ英米的な魔醉から醒めねばなりません。そして嚴しい懺悔によつて東洋に返らねばならない。アキムボ[[2]](#footnote-2)の横着な姿勢から、端坐合掌の敬虔な姿勢に戻らなければなりません。利慾追求の餓鬼道から道を修むる人道に復歸しなければなりません。個人主義から　天皇に歸一したてまつらねばなりません。この肉體の生存や享樂を生の目的とした畜生道から、「不義にして生きんよりは．正義にして死せむ」の人間的境地に舞ひ戻らねばなりません。そして、その筆の力を盡して、同胞を警醒させねばなりません。戀愛を讃美した筆をもつて大義に殉ずる美しさを讃ふべきであります。いはゆる個性なるものを強調した[筆]をもつて、民族性を強調すべきであります。今は料理屋の板場が銃を取つて前線に立ち、三味線やカヤコ[[3]](#footnote-3)を鳴らした藝者の指は、軍需工場に動いてゐます。文士たるもの、兵になるか、産業戰士になるか、しからざれば、筆を剱にしなければなりません。身邊雜記や。個人主義の夢物語や、官能的な詩句を弄する時ではないのであります。すべての作品は敵撃滅の彈丸でなければならないのです。文學者が英米的殘滓を脱却して、本然の姿に返る時に自ら進むべき道が發見されるはづであります。

時勢が時勢だから眞の文學は書けないといふものがある。われは飽くまでも純文學の堡塁を守らう、なんて悲壯もどきなことをいつてゐるものを、私は文學者大會で見たことがあります。私は啞然たらざるを得なかつたのです。今日ほど文學者として大きな感激やテーマに惠まれた時代がまたとありませう[か]。一億國民が死を賭しての戰ひであります。朝から晩まで感激に充たされて居ます。感激は詩の源泉である。感激が文學の源泉であるならば、今日ほど大なる感激を時々刻々味はつたことがありませうか。それなのに文學が作れぬといふ。何のためでせうか。

甘つたるい戀愛物や、くだらない身邊雜記が書けぬといふのでありませう。卑しい性慾を描寫したり、嫉妬とか不義の姦通とかいふ劣等感情が歌へないといふのでせう。それなら話がわかる。さういふ文學者のレンズには今日の感激は映らないかも知れません。いかもの喰の食慾は、健全な獻立では滿足出來ないのも道理であります。この種の文學者はレンズを磨き直し、筆を洗つてかゝらなければなりま[せ]ん。

今日ほど國民が精神的糧、精神的慰安に飢えたことはありません。であるが故に清新健全な文學が要求されてゐます。いな低級な文學趣味がもつと強いかも知れません。酒を飲みたがるやうに。しかし、今日の文學者は、嫖客[[4]](#footnote-4)に媚びる賣笑婦であつてはなりません。正しい人生觀を、眞劍な國民的感激をもつて國民に訴へる熱烈な手紙の發信人でなければならないのです。一語一語肺肝より出でゝ肺肝を衝くものでなければならず、しかもどこまでも眞理性を離れぬものでなくてはならないのであります。こゝから昭和大文學、大東亞の大文學が發足するでありませう。（拍手）

1. 『新時代』1944年9月号。前月開かれた講演会の記録である。見出しに「敵國降伏文人大講演會録　文鋒の撃敵」とあり、次のような説明文がついている。「戰局はいよいよ緊迫である。大和一致以て撃敵一路に邁往する時筆劔を揮ひ、文化戰線の火蓋を切つた朝鮮文人報國會では、先月十七日午後七時半から京城府民大講堂で在鮮諸氏の文士を動員して「敵國降伏大講演會」の豪壯な幕を開いた。ここにその熱辨を録し讀者諸賢の前に供するものである」。大会の順序は以下の通りで③⑤⑦⑨が収録されている。　①開會の辭（略）香山光郎　②詩朗讀（略）杉本長夫　③戰爭と文學　香山光郎　④詩朗讀（略）大島修　⑤読我等必ず勝つ　兪鎭午　⑥詩朗讀（略）古城珠江　⑦文化人に檄す　金村八峰　⑧詩朗讀（略）金村龍濟　⑨亞細亞に歸れ　松村紘一 [↑](#footnote-ref-1)
2. Akimbo。二挺拳銃を抜くための姿勢に由来し、両足を広げ両腕を腰にあてた挑戦的な姿勢のこと。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 伽耶琴（カヤグム）のこと。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 花街で遊ぶ客。 [↑](#footnote-ref-4)